

「交換日記」

北海道 京田賢一

また母と喧嘩してしまった。大掃除を始めたのはいいが、サボってばかりの私を見かねて、ついに母が怒り出したのだ。私も色々と言いつつを並べて対抗したが、とうとう折れて部屋へと向かった。そして、だらだらと掃除し始めた。

机の上を整理しているときだった。奥から懐かしい物が出てきた。ずいぶん埃をかぶっているが、これは覚えている。交換日記だ。

私は幼稚園の頃から小学1年生ぐらいまでの間、母と交換日記をしていた。1日おきに、その日の出来事や伝えたいことなどを交互に書いていくというルールだ。

幼い頃の私はどんなことを考えていたのだろうか。そう思うと、あまり記憶がない。開いて中を見てみることにした。

読み進めていくと、ある日付で手が止まった。私が幼稚園を卒園した日だ。

「けんいちへ いつものこさず、すききらいせず、なんでもたべてくれてありがとう。おべんとうがおわるのは、ちょっとさみしいけど、そつえんおめでとう。 ままより」

卒園式を思い出した。私は小さいながらも悲しかったのか、ずっと俯いたまま泣いていた。そのときには、楽しかった思い出とか、友達と離れ離れになる悲しさだけで、3年間弁当を作ってくれた母への感謝など、これっぽっちもなかっただろう。こちらこそ、ありがとうと言いたかった。自然と涙が頬を伝っていくのがわかる。

交換日記を読み終えると、成長が実感できた。何が書いてあるのか全くわからない字が、辛うじて解読可能な字になっていった。また、書きやすいように母が線を引くと、「せんかくのはいいけど、まっすぐにかいてね。」と少し反抗するようになった。

交換日記は捨てずに、大切に残しておきたい。いつか心の支えになる気がする。この日から大掃除のときは毎回、交換日記を読むようになった。そうして、大掃除は進まない。